

地獄池の發

ち夫である。

今山内事蹟考と云ふ書に據ると、人皇第四十六代孝謙天皇の天平勝寶二年の記に會津郡上の堀の内村と云ふ所に、周圍十間の小池あり、深さ測り知られぬ程であつた名を地獄池とて神代よりの池であつたが、今年六月十九日大地震があつて池の縁が總て地底に没し、周圍一里餘、直徑十八丁の大池となつた、由つて堀の内と云ふを沼澤と改め、沼の主を沼御前と崇め、翌年の其日に一の祠を建てた云々としてある、外の記録も悉く此れと大同小異である。

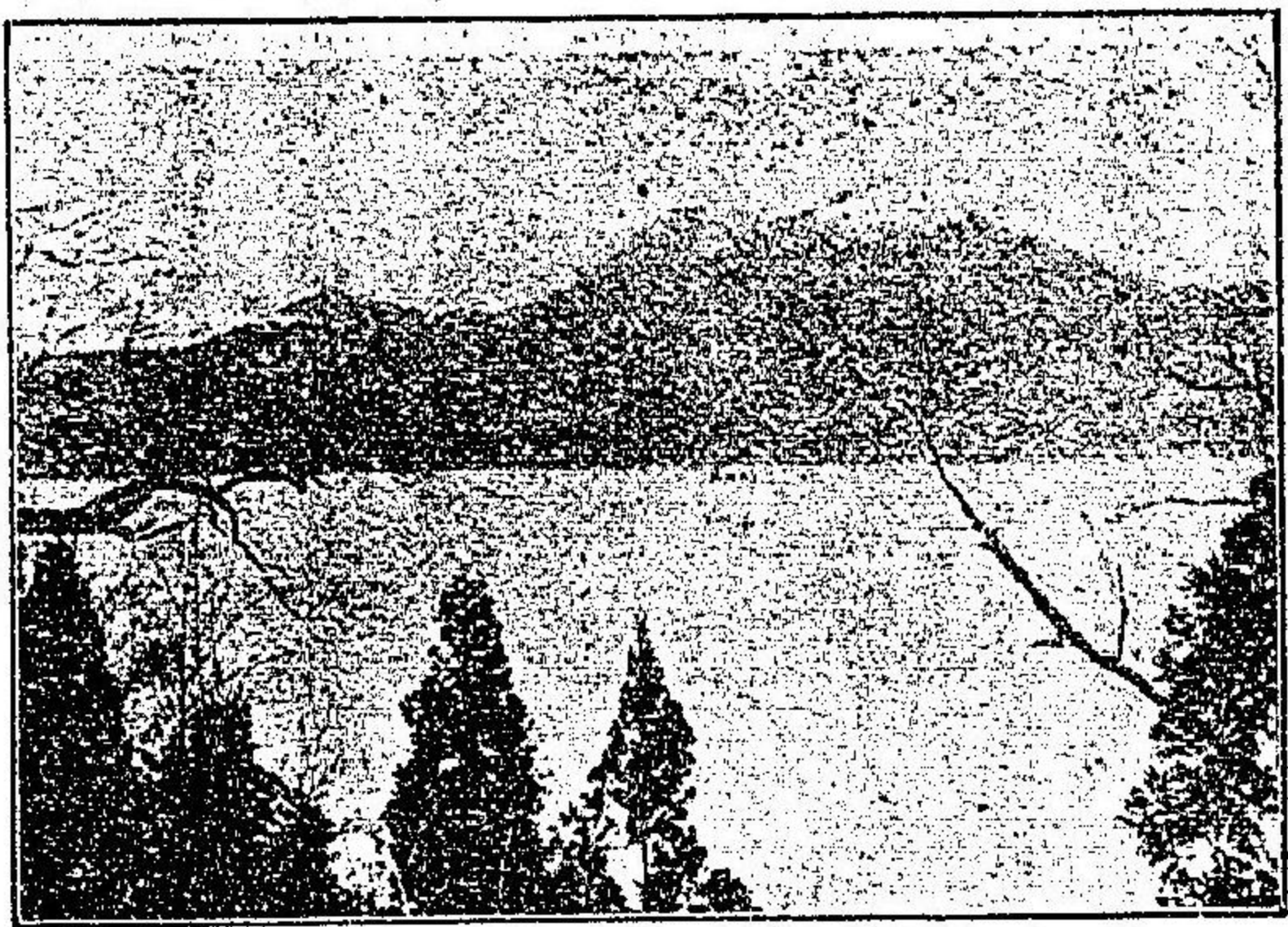
大地震と大雪

又た或る書には地獄池の主は大蛇で、池が地震の爲めに大きな沼に成つたから主を沼御前と呼んだとも書いて居る、其の後屢ば地亡りや地震があつて、新編會津風土記を見ると次ぎの様な事がある、此れには此地を奥州大沼郡大石組と呼んで人口三千六七百あつた、所が文政四年十一月大地震で全潰れの人、家百三十軒、破損三百軒、人畜の死傷夥しく晝夜何回となく左右前後に震つたり下から衝き上げる様なのもあり、山嶽鳴動して大に崩れた、沼も大きくなり、はせぬかと心配して居たが、漸く鳴動も地震も収まり安心して居ると、翌年正

凡て大同年間

月に又た大に震つた、老若男女、我れ勝ちと他村に逃げやうとしたが、折りふし非常の大雪で一方ならぬ難儀をし、従つて死傷も多かつたので、藩侯から江戸

の勘定所へ届け出た云々とある。



古い本を調べて見ると、沼澤沼の出現は大同年間とある、此大同年間と云ふ事には面白い事がある、沼即ち奥州方面の古い事は何の本にも大同年間大同年間としてあつて、例へば十和田湖の出来たのも猪苗代湖の出来たのも、又たその他方々の神社も、沼佛閣の起原も大同年間としてある、思ふに大同年間は此地方が著しく探検せられた時期で、此時發見された事實をば起原とか出現とか云ふ事に書き傳へられたものらしい、此れは少々横道に入つ

て歴史家の繩張りを犯す事だが、尙ほ能く調べて見る餘地がある。

神聖なる湖

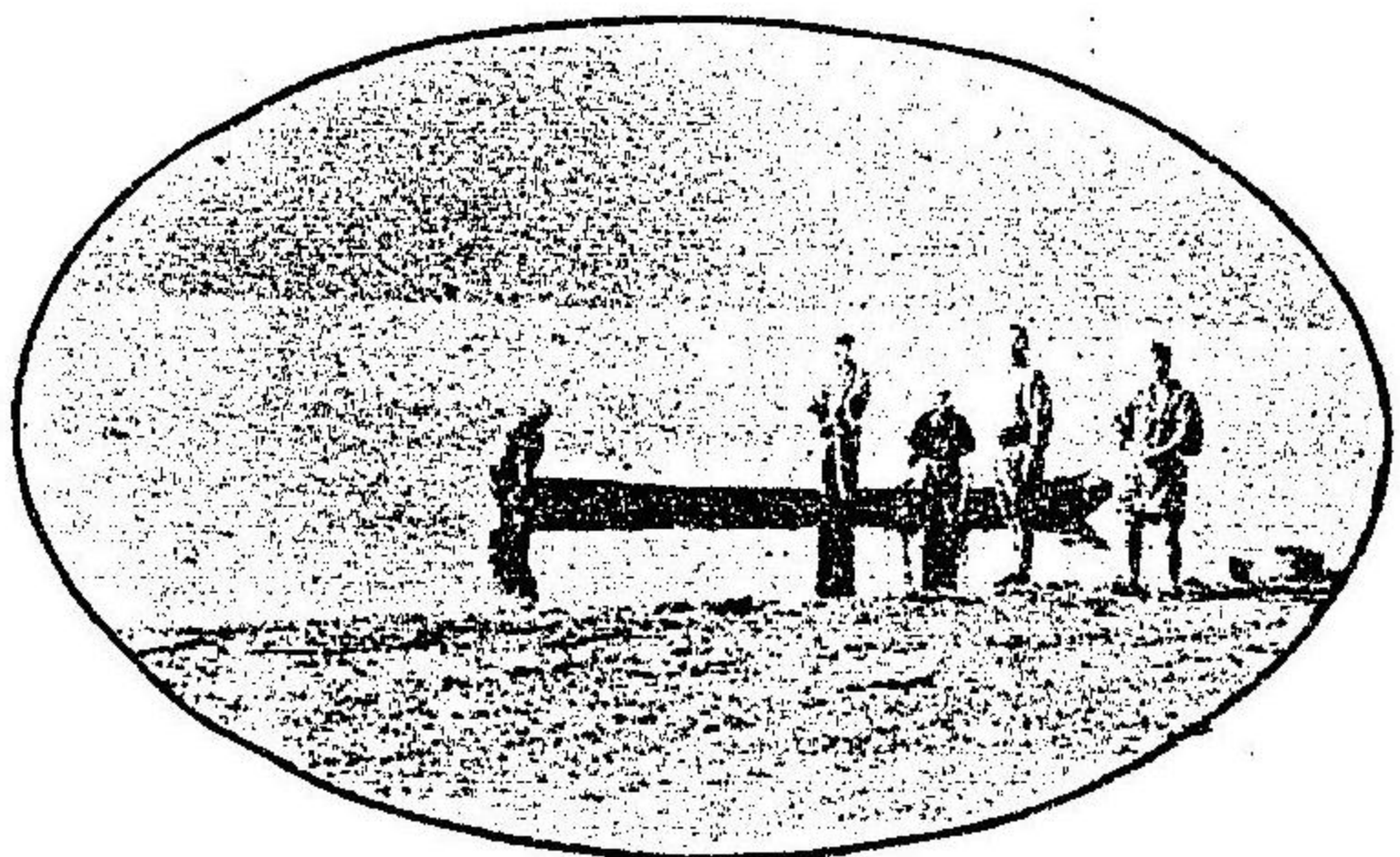
沼澤沼の水は極めて神聖なものとしてある、森閑たる山中に、深碧の色を湛へ

て數千年の面影を其儘に留めて居る有様は、何となく神さびて見える。此湖の水を灌漑用にするにも村民が効驗あらたかなものとして居る。現に昨年余を助けて測量をして呉れた人が、村長に頼んでヤツと唯つた一隻しか無い船を借りて一生懸命に測量していると、村の者が之を聞き傳へて大勢山の上から其船を返せと叫ぶので、遂に中止して仕舞つた。コンな事をするに神様が怒つてドンな事になるか知れぬと云ふのである。尙ほ魚類の養殖をするならば鱒や鮭などの冷水魚が適當であらう。今は僅に少量の雜魚を漁るのみである。

(二) 尾瀬沼

一面の明鏡
東京から尾瀬沼に行くには一は會津から上州路を奇村檜枝岐ヒエダキに出て行くのと、日光湯本から金精峠を経て行くのと二つ途がある。私は湯本の方から行つたが、利根の上流たる片科川カタナカに沿ふて湖り、沼上峠の頂から見下ろすと、北西に當つて足下に漫々と開ける一面の明鏡は即ち尾瀬沼で、湖を隔てゝは死火山の燧嶽があり、實に得も言はれぬ佳景、全く一幅の名畫で、決して天然に成つた者とは思はれぬ程である。湖の周圍はことごとく無人の境で極めて寂寥であ

トランブラ



沼 澤 沼

る。南側は直ちに山、北側は一面の草原で所々に白樺の森がある。燧岳の麓の湖畔に山に上る行者の雨露を凌ぐ一軒の無人の家があるが、街道から此の家まで一里餘、其間ダク／＼した草原で、夏でも春の様な氣候、常に水蒸氣の多い朦朧たる風景、美しい若緑が恰かも毛氈を敷き詰めたかのやう。其中に種々桔梗、斯萱、女郎花、擬寶珠、カンザウなどの花が咲いて居る。重い荷物を負ふた人夫などが時として膝切りも入る位で、詰り元と湖水の一部であつたのである。此れは寒國の湖縁に能くあるもので、歐洲では之をトランブラン「Tumblant 即ち「振へる地」と唱へて居る。又た湖中に突出して居る森林を以て蔽はれた高い所が三つ四つあるが、此れは燧嶽方面から熔岩が湖へ流れ込んだものが凝結したのである。その高い所と高い所の間には即ち美しい草原があるのである。

ヌシは赤牛

私の行つた時は丁度八月の中旬であつたが、夫れて午前五時の氣温が攝氏十二度、日中で十九度と云ふ冷さである。此所へ來る時には戸倉と云ふ村から『鬼』と綽名せらるゝ老爺を備ふて來たが、此の『鬼』が村の人に遇ふときつと、ヌシムて宜しう』と云ふ夏のさ中に温くて好いと云ふのは一寸可笑しいが、以てその寒さを知る可きである。湖の主は赤牛だから牛を持つて行くと、山が暴れるとて『鬼』に牛肉罐詰を持つて行くことを差し止められたのは可笑かつた。

尾瀬沼の名稱

『鬼』の語る所に據ると、此沼は早稻沼が本名で尾瀬沼は此の沼の西にあつたが、今は水澤に成つて仕舞つた、其所は今に尾瀬が原と言つて、幾多の熔岩の流れて仕切れて、春先き雪融の後などには幾多の湖が珠數繋ぎになつて居る。此處の北岸の小高き處は嘗て平家の落武者尾瀬大納言が、此山奥に隠れて居たので、尾瀬沼と云ふ様になつた、此の時分には稻を作つたらしいが、今は其跡も無い。

湖上の奇觀

尾瀬沼の湖縁は、北側淺くその上の方に小い砂濱湖尻には礫濱がある、例のトランブラシの一番大きいのは北側にあつて、之を奥沼平と呼んで居るが、泥炭

珍な堰止湖

質でデク／＼して居る草の根で閉ぢられて居る、其中に又た所々に圓形の小い湖水があり、其上には時々植物が一塊づつ浮遊し、風に從つて水上を漂うて居るのは却々の奇觀である、即ち浮島の一種で有名な富士山下の浮嶋沼、山形の大沼などと同種のものである。

水温と透度

尾瀬沼は海拔五千四百六十尺、南北に峠を控へた狭い部分にあつて、恰かも臺地の上に水を湛えた様なものだ、成因は燧ヶ岳の熔岩の爲に水が堰き止められて出來た、所謂熔岩堰止湖で、日本では富士の山中湖と同型である。

予の觀測では、水温は表面で十七度、深度八米の底で十六度、水の色はフォールル氏の第九號と十號の間である、透明度が四米三十、山中の湖水の中で、同深の諏訪湖が冬期最も透明な期節で二米五十なのに比し、遙かに透明度が強い、色は諏訪湖よりいくらか青い、色の青い程透明度が大きいと云ふ眞理を此事實から歸納する事が出来る。

狐の足跡

此湖に面白い事は氷の張るのは、冬至頃で八十八夜頃に融ける、此融氷期の前後に狐が氷上を渡ると跡が着く、跡があるとモウ人間は渡られぬとしてある

養魚

諏訪湖では御渡と稱し、狐の渡つた跡が出来るのを人馬が通り得る合圖として居るのに、此沼でも丁度アベコベである、無論此沼のは御渡りでは無い。序に此沼では漁業を遣つて居ぬ、セイゼイ鮒が居る位だが澤山に居ると見え風波の強いときには屢々岸へ打上られて死で居ることがある、將來も養殖の見込は先づ無いらしい。

(三) 盤梯山北の三大湖

其一 檜原湖

成因の珍なる湖
成生當時の慘狀

世界の湖沼は殆ど悉く何千年の齡を保つたもの計りだが、茲に我々の時代に現に呱呱の聲を擧げて今に洋々として水を湛へ、然かも其成因が火山岩作用屑の堰止めと云ふ極めて珍な湖が我邦にあるのは、頗る趣味ある事である。磐梯山の北麓なる檜原、小野川、秋元の三大湖は即ち夫れである、此等は元と谷であつたのが、明治廿一年七月十五日の磐梯山爆發の爲に飛散した岩屑や泥流などが流出して、川の流れを堰き止め、自然と大なる湖水を形作つたのである。三つの中一番大きいのが、檜原湖である、會津から米澤へ行く途中の檜原峠の

長瀬川

アカ腹一點張の漁業

雄子澤湖域



檜原湖

麓から真南へ長さが一里半、幅が十町か十五町に亘る細長い湖である。土地の者と船を湖上に泛べながら爆發當時の話を聞くと極めて慘憺たるものだ。私共が丁度此の下の邊で老父と共に島を稼いで居ると突然の大噴火で、私共は逃げ了せたが老父がツイ途中で埋つて仕舞つたなどと語る、當時此話した者の稼いで居た場所は今は實に四五十尺の水底に没して居るのである。

湖水の南端近く長瀬川が流れ出て、其川の邊りに漁夫の小屋がある。此漁夫は小船は漕ぐが泳ぎは知らぬ、以て此湖の新成湖たることが推して知られる。魚は無論湖が出来てから繁殖したもので、専らアカハラが取れる、此の小屋に滞在した折りにも、三度の食事は勿論お茶受までアカハラ一點張りなのも可笑かつた。

舟で湖上を見廻つたが、此の小屋の南に澤山の島がある、此の邊は雄子澤と云ふ谷が西から東に流れて直角を爲して長瀬川に流れ込んだのが、此の噴出物

に堰止められて湖となつた、其當時は獨立して居つたが今は檜原湖と連絡して居る、此部分は檜原湖と別の方で、深さも劣り長さも短い、岩屑がゴツ／＼水面に背を露はし、圓錐形の島々を作り極めて男性的な壯絶な風景で、坐ろに噴火當時の慘狀を偲ばせる。殊に雄子澤の部落は元と十數戸もあつたのが、今は悉く五六十尺の水底で、當時同部落住民の殘命者が今日湖の西岸の小高い丘の上に移住して居る。

湖中の珊瑚樹

此の二湖連絡したのを一般に檜原湖と言ふて居るが、我等は區別して南を雄子澤湖域、北のを檜原湖域と呼ぶ、面白いのは檜原村の近所や雄子湖域の上の方で昔しの斜面を爲して居た谷間に生いて居た大木が水中に没した爲め、其の枝が恰かも海中の珊瑚樹の様に立つて居る事である、中には湖上遙かに高く出て居るもあるが、冬季結氷の際に大分伐り出した、然かも氷の上に丈餘も積んだ雪の上で伐るから、伐つた跡が夏に水面一丈餘も出て居るのがある。試みに檜原湖畔に立ち漫々たる湖を隔て、盤梯山を望むと、噴氣孔からは濛々と白煙を吐き、其の邊は流出した泥流の荒野は極めて雄壯な極めて不規則

壯絶快絶の景

な形で起伏して、坐ろ男子の膽を奪ふの壯景は又なく快、更に目を近く湖面に注げば、水面に頭を顯した彼の「流れ山」の上には、草木が鬱蒼と生ひ茂つて繪も及ばぬ美しさである。彼の鳥海山麓象潟の六十六島、北海道駒ヶ嶽の麓なる大沼中の島島、扱ては箱根、葦の湖の西端、姥子道の傍にある小山など、此と同種類のものである。

其二 小野川湖と秋元湖

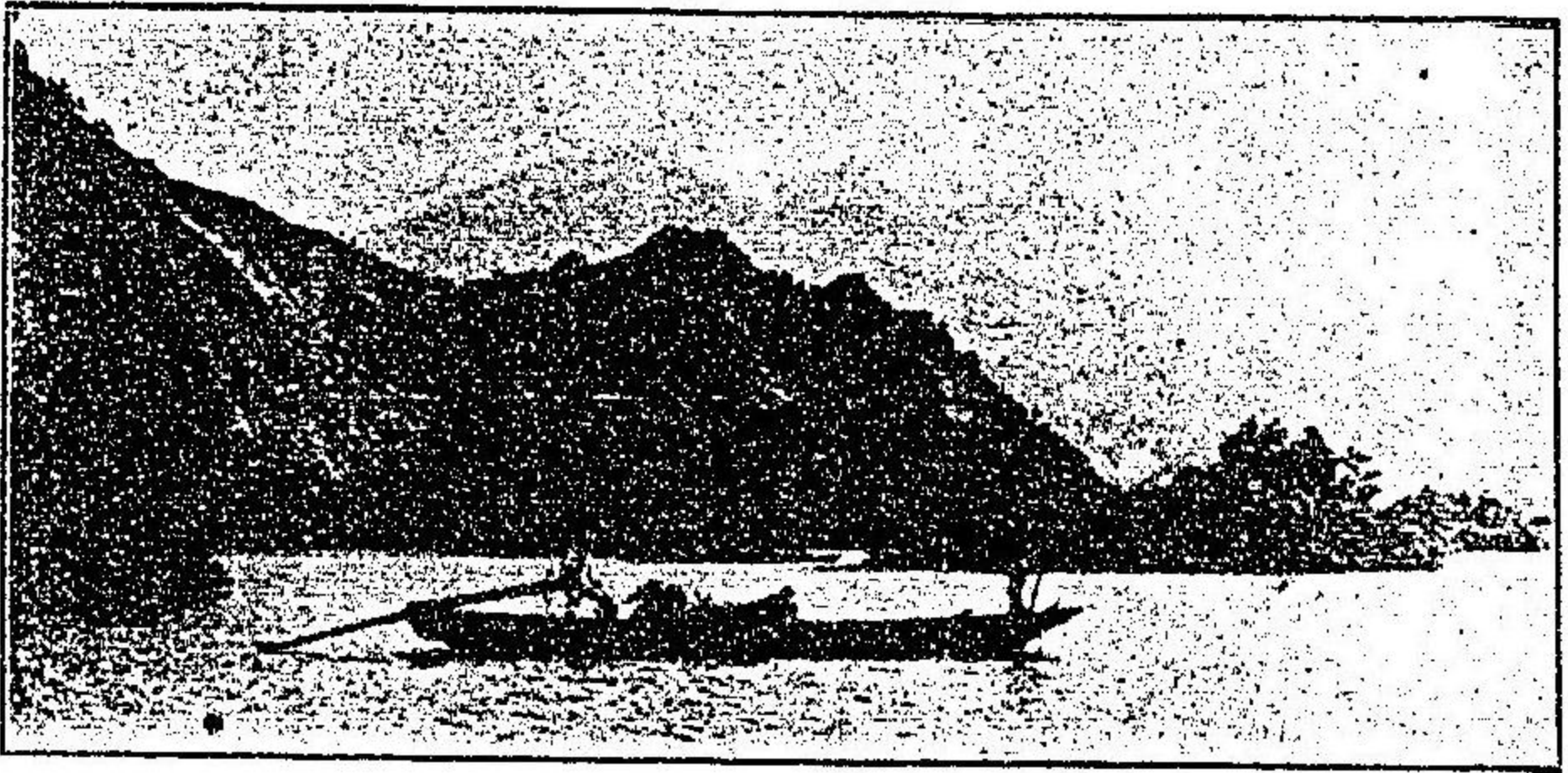
小野川湖は吾妻山の麓、前の檜原湖の長瀬川の出口から十數町の下に流れ込んで居る小野川の上流にある長さ三十町の細長い湖で、形も成因も檜原湖と同様である。湖から二三町の山中に小野川部落がある。此邊の人家は一旦水に浸つて後水が引いたので、今だに家屋が水に荒らされた儘に残つて居る。下度舟に乗り合はした子供に何所へ行くかと聞いたら、小野川のお祖父さんの許へ食物を持って行くと言ふ、段々聞いて見ると、若い者は別の方へ移住したが、その老爺のみは、昔し住み慣れた家の戀々去り難く、一人篋れ果てた舊家屋に住んで居ると云ふのであつた。

三十間の細長い小野川湖

秋元湖畔に
危く立つ老
松

湖壁の弱い
所

秋元湖は三つの中、最も低く、一番東にある、東西に細長い湖である。深い谷に堰



秋元湖

止められて出来たもので、四方が悉く鬱蒼たる深林である。七八年前には木を盛に伐り出し、湖尻には製材所も出来て居た。その中には例の圓錐形の島がドツツアリある。其中には火山質で無い第三紀層で出来た稍々高い島があるが、其上には二三の老松危く立ちすくみ、其中には鎮守の祠があつて却々雅致がある。此島の麓は元と秋元の部落のあつた所だが、今は湖中の最深所として三四十尺の水底にあるのである。

眞三 三湖の潰決状況

檜原、小野川、秋元の三湖の成因は、既記の如く堰止め湖で出来立ての當時は、何れも出口の無いものであつた。所が雄子澤の水が段々増した結果、檜原湖と合し、其の水が更に排水口を

百八十尺の
山

一聲の大音
響

成つた。かうなると、最も湖壁の弱い部分、堰止め作用の一番弱い所を選ぶ譯で即ち狐高森と云ふ小山の北麓から流れ出したのである。破裂當時は川下ではイッ溢水するかと心配したが、幸に杞憂であつた。即ち湖が徐々と膨張して徐徐と下流へ流れ出したからである。時は廿一年の秋の頃であつた。

小野川の潰決は此より先きて廿二年二月頃から少し宛然かも深い雪の下を人の氣が着かぬ内に流れ出して、三月半頃には幅三尺餘の二筋の流れとなつて居た。所が四月十三日に春先きの雪解けの爲め水量を増し、湖の南端の山が壊れること約百五十餘尺、これが動機となつてドツと計りに此の口から流れ出たのが幅百八十餘尺の川となり、南東を指して滔々と流れ下つて、此の水は秋元湖の西端へ流入したが、秋元湖も共に増水の後、出口を求めて長瀬川の下流に奔注したのである。此の兩湖の潰決は殆ど同時であつた。此潰決當時の有様を當時地理局から出張した技師の談に聞くと、此日は雲が少し降つて居たが、午後七時半一聲砲聲の如き音響と共に俄然濁水押し寄せて来て、下流の酢川では磐瀬村で七尺餘、猪苗代湖畔の月輪村金田で一丈五尺餘を増し、八時頃

よりは愈よ一大事となり十一時過ぎになつて漸く収まつた、此の水害の爲め田畑の被害町歩實に四百三十餘町歩であつた、秋元湖より下流約一里程の間川上温泉邊の長瀬川筋は川床が噴出物の上にあるのと流量が著しく増加したのとで、僅の間に深さ數十尺の狭谷を穿たのである。

第四章 猪苗代湖

(一) 湖の傳説と其成因

猪苗代と云ふ名に就いては面白い傳説がある、即ち昔し盤梯明神の靈驗によつて一匹の猪が出て、此の邊の平原を何所となく駆け廻つて苗代田を作つた。そこへ人が通り懸り穀類の實を蒔いたので、こゝが自から田になつて猪が作つた苗代が基であるから猪苗代とかう云ふのである、今又舊記に由つて、何時頃から此の名が附いたかを調べて見ると、湖畔の塔寺八幡宮に残つて居る長帳の寶徳三年の記事に、猪苗代殿と云ふ名前が見えて居る、之を以て考へると其以前から已に城主があつたものと思はれる。其頃には可成大きい東北屈指の市街で、後に盤梯山を控へ前には裾野の平原があり、川としては酢川が流れて、一種天成の要害の地であつたらしい。

萬歳池と翁島

湖の成因に關する傳説には、大同元年俄かに一湖生じ湖中には一の島が出事た、盤梯山の麓故之を盤梯池と名づけ、更らに之を萬歳の池と訛り、此の萬歳に

割合に若い湖

因みて島を翁島とは名づけたとある。又は或る書には、湖が出来ると同時に、盤梯山の噴火が熄んだともある。慶長十六年八月にも大地震あり、山崩れ日橋川塞がり、蒲生氏の入足にて決したが、其の爲めに川下の水は汎濫し、下の方に山崎の新湖が出た、後種々計畫があつて水を落したが、半分位しか引かぬ、酢川の沿岸も所々に山崩れがあつて三大湖が出来た……其後寶暦年間も山崩れ半在家村にも湖が出来た云々と書いてある。又寛永八年九月にも湖暴れ洪水となり湖塞がつたが、文化三年に復舊したともある。此等は必ずしも噴火のみでなく、地震その他の地異の爲に度々變動があつた事が知れる。

又大同年間の古書には、「此山火を吐き近傍十里四方の地硫黄を生じ蒸發して人身に害あり猪苗代の湖水成立し……噴火も硫氣も止む……」云々と書いてある。又大同年間の噴火の時には月輪郷、更科郷などの五十餘ヶ村が陥落したと唱へて居る。此等の事から考へると、此湖は有史以後に出来た比較的新らしいものらしい。湖縁の地質の構造から考へて見ても、盤梯から来た噴出物が同山の南西に堆積して那須山脉を通じて居る分水線の兩側より源を發す

陥落地帯内の堰止湖

會津の最大湖

る流水を、此に堰止て、今日の猪苗代湖が出来たのである。

湖のある回んだ所は、會津平原の一部で、猪苗代湖の出来た前には、恐らく前の日橋川流域が廣くて此の平原と連絡したもので、如くである。之から考へると猪苗代湖は梯盤山の噴火に際して、特に陥没したのではなく、會津平原と同時に出来た土地と思はれる。されば今の翁島停車場邊から、廣田停車場までの間鐵道が布かれてある邊が、盤梯方面から来た噴出物の爲めに、大湖を堰き止めた其跡であらうと思はれる。

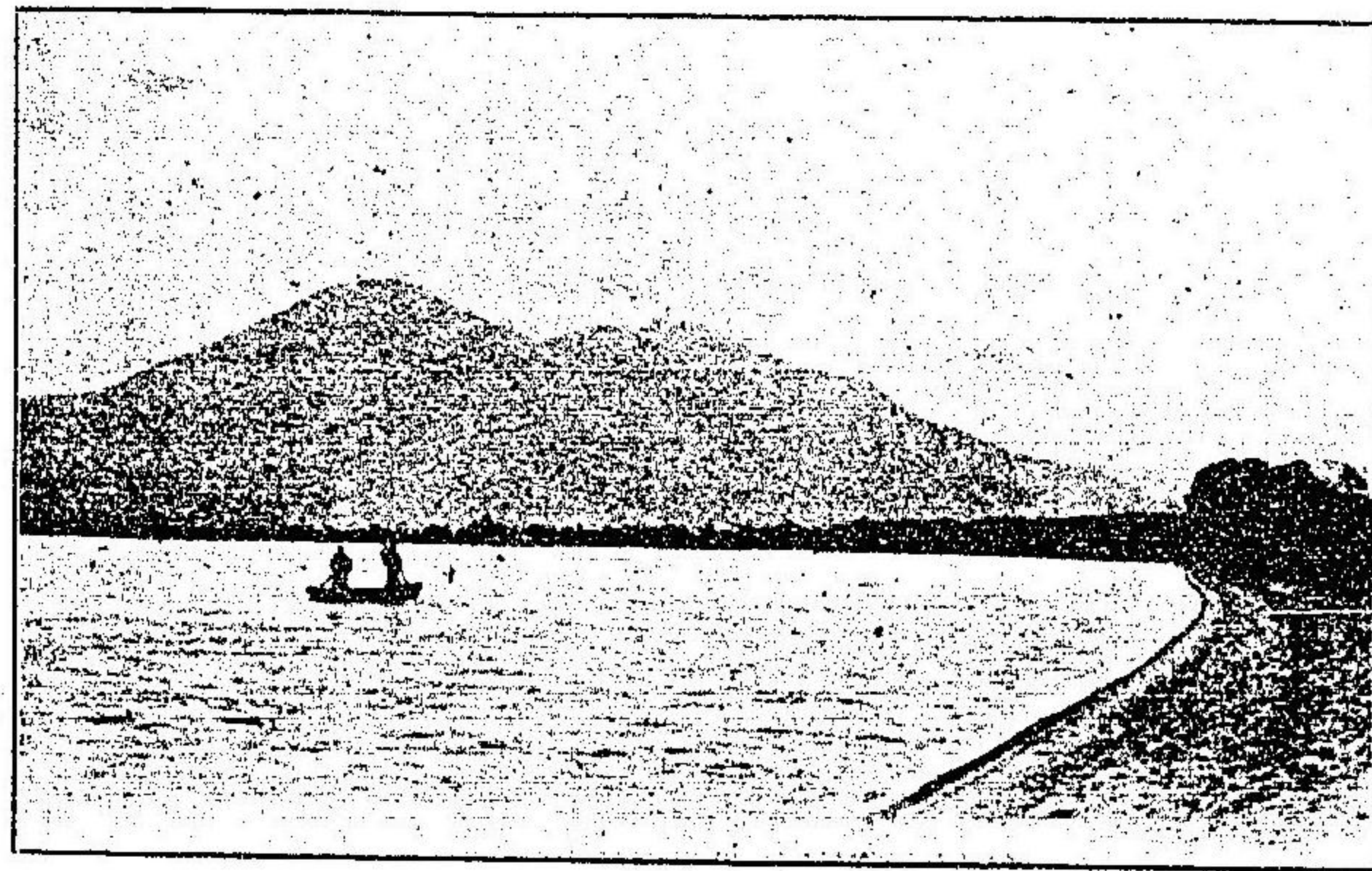
(二) 湖面の形態と安積疏水路

猪苗代湖は日本全國から見ると四五番目の大さであるが、會津地方では第一番である。海拔千六百九十餘尺、周圍十三里十九町、面積七方里、形極めて不規則だが南から北を見下ろすと、恰も禿頭の人が左向きの横顔に似て居る。即ち船津は頭、山瀨は鼻の上、長瀬川は口、門の口の阿賀川の流出口は咽喉に當つて、船津川其他の數多の水流は恰かも禿頭に生ひて居るポヤ／＼毛に似て居る。此の頭为天邊から咽喉迄の長徑四里、長瀬川口の所調口から後頭の中央赤崎

北岸の三稜洲

地文學の標本

有名な疏水口



(む望を山梯盤りよ濱神天)湖代苗猪

迄は一里半で此が短徑である。湖の北側は盤梯山の裾野に接して砂濱を成して居る。此邊所々に細い入江があり、沼の有様を爲して睡蓮や茅などが生いて今は船を入れて置く。近き過去では、此邊長瀬川の支流であつたのである。長瀬川口の三稜洲は檜原方面から多量に運んで來る坭の爲に、年々發達し前へくと出て行く。此三稜洲の先端を見ると、極めて小規模ではあるが埃及ナイル河の出口にメンザレ湖其他の湖水が澤山ある様に、小い瀉が澤山あつて、其外側には長い洲の帯がある。之を附近の山瀉の丘上から眺めると、實に地文學上の最も好き標本である。

次に湖の東側は美しい砂濱で、一條の國道が之に沿ふて居る。此邊の秋の紅葉の景色は絶佳なものだ。山瀉の村の在る所は彼

疏水工事の利

絶佳の風景

の有名な安積疏水口の入口である。此疏水口は明治初年に於ける日本の土木工事中の重なるものゝ一つで十二年一月起工約四ヶ年半の年月を以て竣功した。此工事の爲めに湖の水面を下げ、湖岸に廣い新開墾地を得たと同時に、此口から落した水を東へ引き、沼上峠の隧道を潜らして、更に東へ抜いて一の瀧を作り、其末流を阿武隈上流なる郡山町附近の水利に乏しい所に持つて來た。今日此水の爲めに潤ふて居る區域は非常に廣いものである。沼上峠を出た所には之を利用する發電所があり、其電力は郡山の點燈用及び諸工場の動力用となつて居り、水自身も餘程灌漑用となつて居る。郡山公園の池にある噴水も此れて風致を添ふるものにも成つて居る。

夫から湖の南側に進めば近年有栖川宮殿下の御別邸が御造築になつたので、自働車も通る様な立派な道が出来て居る。此邊の小高い所に上つて湖面を眺めると岸には大きい岩石があり、此れに怒濤が打ちつけ、洋々海の如き壯觀、更らに湖面を隔て、北には傾斜の緩かな裾野の奥に盤梯山が美しい火山の形を示して、夫れは實に好い景色である。

布藤堰と戸口堰

更らに湖の西に進めば、多くは絶壁で所々に灣があり、漁村が散在して居る。何分道がついて居ないから、大變廻り道になつて居るが、斯くして湖の出口へ到着する。此の出口には戸の口と云つて、昔は旗亭數軒もあり、一寸繁華な場所であつた。こゝは喇叭狀の灣の底から川が流れ出し、其所に十六橋と唱ふる有名なものがある。其下に十六の水門がある。此の水は一部は阿賀川となるが、兩側に一つ宛の堰口あり、其の右側のを布藤堰、左のを戸口堰と呼ぶ。戸口堰は有名なもので、彼白虎隊十六健兒で名高い飯盛山の隧道を貫いて鶴が城の外濠に落ちる。又布藤堰は猫魔山麓の灌漑用水となつて居る。兩堰共に明治十六年の改築にかゝり、此が爲めに水に潤ふ面積は實に新田地四千町歩、悪田を善くしたのが三千八百町歩に達して居る。

阿賀川の末流

此川の下流は猪苗代の水を堰き止めて居る盤梯山からの噴出物の間を縫うて稍々深い谷をなし、急流となつて落ちて行く。其流れの沿岸は即ち今日水力電氣の問題になつて居るもので、已に工場も出来て居るが、水は無盡藏故極めて適當な事業と思はれる。戸の口から少しく北に翁嶋がある。湖中唯一の島で

また紅葉の名所である。其の對岸の小高い所には、即ち有栖川宮の御別邸がある。

(三) 奇なる水位の變化と水質

明治六年以來戸の口と山潟の二ヶ所に量水標があつて此に就て調査した所に據ると、冬の二月中は雪の爲め水が流れ込まぬので、水の高さが此時は一番低い。夫れが五月になると、雪解の爲めに一年中最高の水となる。六七月には雨があつても水門を開ける爲めに減水する。明治十二年以前の水位を見ると、矢張最高は雪解の期節である。一體日本の湖沼の水は冬最も少く、春先に増し、夏に減り、秋に殖ゑると云ふのが普通である。即ち何れもフオレル氏の所謂溫帶湖と云ふものに相當して居る。

然して日本の湖沼に面白い事は、春に最高水となるのと秋の風雨期に最高水になるのと二つある。即ち日本海斜面にある湖沼は春に高水となるもので、太平洋斜面のは秋に高水となる。此に就て面白いのは琵琶湖の如き日本海にも太平洋にも近い所にあるものは、日本海斜面のものと同じ徴候を呈し、春先に

日本海斜面の水位變化式

調節作用

増水する事である。

猪苗代湖の中で最も早く増水を感じるのは、山潟の量水標である。此處に感じてから二十四時間経つて戸の口で感ずる。これは要するに長瀬川の水が流入口から段々に湖面の全部に擴がり、最後に戸の口に達する爲めである。観測者の談によれば、盤梯山の破裂以來水位に著しく變化を來したと云ふが、此は破裂前に生ひ茂つて居た大森林が、流水の調節作用をして居たが、破裂後は荒野に變じて仕舞つたので、少しの降雨でも洪水が起る様になつた。然かし此頃は、檜原湖や其他の湖水を一通通ふてから流れ來るので、水位の變化も可なり順當になつた。

湖の深度

猪苗代湖は北側が淺く、中央部から稍々西の方、赤崎の鼻に近い所が最深處である。此所を三把菅と云ふが、此の名の起因に就て土地の人は斯う言つて居る。或時一人の漁夫が來て、此處の深さを測る爲めに持つて來た三把の菅を繋ぎ合せて水に入れたが、其れでも底に届かなかつた、と云ふので、扱こそ三把菅が名になつたのだ。同地田中廣作氏の錘測した所によると百二米である。水温は

透明度

別に他湖と變つた事なく、夏は表面二十五度、底は五度、冬は表面の温度が随分低下するが、大きい波浪があるので氷は張らない。

唯長瀬川から雪を流して來るので、雪の塊が恰かも池に白鳥の浮遊するやうに見える事がある。透明度は十二米、色はフオーレル標準液四號から五號の間であるが、殊に長瀬川の口は沼尻山から硫黄を流して居るので、水色が黄灰色を呈し、且夥だしく硫臭を帯びて居る。淺い所には硫黄の沈澱物がある、無論此の邊は透明度も至て少い。

湖水の比重

此湖に面白いのは水中に硫酸鹽類の多量を含んで居る事である、従つて水は決して淡水でなく、比重計を以て優に計り得られる。此鹽類を運んで來るのは例の長瀬川であるから、其川口の水の比重最も重く、遠ざかるに従つて輕くなる、又た水が深くなるに従つて重くなつて居る、畢竟段々に硫酸鹽類の分量が多くなる爲めであらう。

硫酸鹽類

深さ五十米以上から殊に濃厚になる、又洪水の後には格別に烈しくなる、然かも斯る化學的成分を含める事の知られたのは僅かに四十三年で、其筋の研究

の結果である。余も何れ、實地に調査しやうと思つて居る、之れをドシ／＼湖に供給する本家本元は沼尻火山で、硫黄採掘所からも流れて来るのである。此外に盤梯山からも流れて来る、夫れが洪水毎に多量に来て、何れも湖底の深い所に沈澱して居る、斯る現象は我邦では獨り猪苗代湖にあるのみではなく、火山湖などには時々見るが、此の湖の様に大きく且深い湖には他に類がない。此湖の硫酸鹽類が斯く多く水中殊に深き底に溜つて居るのは全く此湖が出て此方、幾度となく盤梯や沼尻の噴火や爆裂をやつた度毎に流れ込んだのが、何時となく積つたのであるまいかと思はれる。斯る水質故此湖の漁業も餘り振はない。

(四) 此湖特有の虹鱒

湖の南側を進んで行くと會津から白河方面への街道に近いので、幾多の部落があるが、其内稍々大きいのは船津で、こゝに船津川が入る。船津川は即ち一種の鱒の上つて来る川である。此鱒こそ實に日本國中此湖の外には決して棲つて居ぬ珍種で、然も其先祖は遠く米國から出たのであるのは面白いではない。

先祖は米國の鱒

なか／＼の美味

か、此に就いては歴史がある、恰かも明治十年米國加州の水産委員會にては、我が政府に對して同地方に産する虹鱒 (*Salmo iridis*) の卵一萬粒を贈つて來た。日本へ到着した時は其半は死んで居たが、扱て魚卵五千粒を孵化させる様な設備は自慢ぢやないが、當時日本には無かつたので、當の擔當者たる關澤明晴氏が四谷の自宅で孵化させたが、其中に青梅在の柚木に新に孵化池を設けて放つた。其後幾多の變遷を経て、十三年四月に雄三匹雌五匹から二萬の卵を得て之を猪苗代湖と中宮祠湖に放つた。所が種々の原因から中宮祠湖には此種のもの全く消滅し、今日では唯獨り其子孫が猪苗代に残つて居る次第である。此の虹鱒は船津の漁夫はサチと云つて居るが、大さ一尺乃至一尺五寸で、重量二百目から一貫五百目迄ある。丁度秋に船津川に上つて來るのを捕へて卵を絞り、湖の北岸川桁なる縣の水産試験場孵化所で孵化して更に又た湖に放つと云ふ事業を四十三年から始めた、翌年は更に分量を増し一部を檜原湖にも放つ事になつて居る、味は在來の鱒に比べると遙かに美味である。

第五章 信州仁科の三湖

(一) 木崎湖

三湖の排水
農具川

中央支線明科停車場に下車、高瀬川に沿うて糸魚川街道を三里で池田町村、此宿から更に三里北に進めば北安曇郡々役所のある大町町がある、此の高瀬川の水は谷川で上流に雨があれば直ぐ濁流となつて来るが、大町町に入る前に道邊で極めて美しい水が高瀬川の右岸に入つて来るのが、農具川と云ふのが夫れで、清冽な水が川幅一パイに流れ、其兩側には高瀬川の様な河原を殘さず兩側には美しい青草が生えて居る、シテ見れば此川は年中殆ど同じ分量を極めて平和に流れて居る事が解る。蓋し農具川の源には大湖水があつて如何なる大雨でも泥水が山から來ても一度湖に入れば美事に瀘過せられ、美しい上汁が流れて來るのである。言はゞ此の大湖は水道の貯水池と瀘過池とを兼ねて居るやうなものである。

大町町

大町は山中の淋しい町だが昔し糸魚川街道の盛であつた頃は、北陸から信州

良水の誇り

に入る生魚の荷が必ず通ふた所で宿場としては可なりの繁華であつたが、今は早や其姿なくこれぞと云ふ産業も起らず、全く荒れ果てた町となつた。其位置が高瀬、農具兩川の間、介在して居るので屢々汎濫を受け、現に昨年、夏もサント流された平地の中央にあつて重なる市街は南北に通じ、此れに直角をなせる横通りと二三の裏通りとがある計り、唯山間の都會だけに人家の構造が稍々雅致を帯びて居る。飲料水は町の東半は高瀬川の水、西半は農具川の水で常に兩方で銘々水の好いのを誇り合ふ、無論、農具川の水の方が好いではあるが、昨今水源の湖水に養魚をすると云ふので、之を用水とするのはいかぬなどと馬鹿なことを言ふて居る町民もある。

對山か背山
か

大町の北方には所謂日本アルプの連峰浪の如く次へくと立ち並んで言語に言ひ盡せぬ壯大の景色を呈して居る、殊に春先、足元の麥瀧が緑の波打つのと相對して、眞白の雪を戴ける連峯の眺めは確かに氷河を戴けるアルプを望むの觀がある。又、夏の時でも山腹には常に雪がある、低い所には有名な針の木峠があつて之れを越え、ると黒部川の谷へ下り野宿して、更に峠を越

大町の前身

えて越中に出づるのである。此町に不釣合な三階造の大旅館がある、對山館と云ふ、前は松本方面の低い山しか見えぬが、後ろは日本アルプの絶景を恣にする事が出来る、それで背山館とでも云つたら適當であらう。

昔し孝極天皇の皇子高明親王の子室津屋と云ふ人が城を此地に築いたのが始めて、其後種々の變遷を経て後、仁科氏の手に入り六十六代續いて戰國の世に絶えて仕舞つた。此城は即ち今の大町の前身で、木崎湖畔に其跡を止めて居る。大町の北、糸魚川街道を一里進むと、此街道は山中には珍らしい平坦で、俥も馬車も通ふ、驪て木崎湖畔に行けば數軒の茶店が恰かも湖の出口即ち農具川の生れる所にある、此所から舟も出るし、大町中學校の遊泳場で端艇なども浮んで居るし、先づ此地方の風景地遊山地である。

湖畔の史蹟

木崎は南北に細長く一里弱、周圍一里三十二町と唱へて居る、湖の西には可なり高い傾斜の急な山があり其山の裏が谷を隔て、即ち日本アルプの連峯に對して居るのである。湖岸より此の連峯の景も又たなく好い、山の中腹には石灰小屋がある、湖縁で出口に近く森と稱する小部落があつて、こゝに所謂森の



の御陵と云ふのが此寺の中にある、兎も角史蹟上面白い所である。

湖の東側は例の糸魚川街道で湖形は不規則、半ばにして小川流入するが此川

城趾と云ふのがある、元と仁科氏の居城で、承久三年六月仁科盛遠、王事に勤めて賊を防ぎ越中の礪並山に戦死するや村を擧げて苅野谷政治の領となつた

政治は仁科の舊臣を遇すること無情で、安信貞綱の采邑を奪ふや、貞綱、政治を殺して仁科を恢復せんとし、貞應元年俄かに政治を森城に襲ふた。貞綱は戦死したが其子貞高が首尾よく政治を殺し自ら仁科と稱した。然るに貞高又た暴戾で民心服さない、天福元年貞高遂に木曾義重の滅す所となつた、後吉野朝に至つて一條修理大夫高直入部して後、駒澤城と稱したと言つて居る。駒澤城は同村の裏の谷間にある、大澤寺と云ふ寺があるが、此は坂上田村麿の作つた寺としてあつて、後醍醐天皇の皇子となつた若宮親王

デルタの上
の美田

の持つて来る泥の爲め湖の中央に著しく三角洲がある、此のデルタは段々發達して遂には湖が二つに切斷される様になるだらうと思ふ、緩やかに傾斜して居るデルタの上に田が一面にあつて、秋には刈つた稻を干す爲めに木で造つたものが出来る、之を遠くから望めば如何にも瑞西山中の光景のやうに見える、アルプ山の麓にある湖水地方の様で、デルタの上の美田は恰かも彼地の牧場、稻を干すのは其牧場の垣とも見える、山中の湖へ谷川がデルタを築き上げ、今にも切れさうなのが恰かもアルプ山中のシルヴァプラナ湖にソックリである。

水色透明度

湖の深は幅の最も広い部分の中央より稍々西に近き所で、三十九米ある、蓋し高山の麓になつて居る湖の深いのは原則である、湖底は平坦で湖の南北に通じ西側に少しく偏して深い、此湖は詰り一の谷間に水を湛えて居るので、中央は埋つて仕舞つた爲に底が平坦になつたのである、湖の水は何時も美しいが大雨でもあつて谷川から濁水を送り込んで来ると濁る、四十三年の夏の暴風雨にも湖水は黄褐色となつて、恰かも牛乳を入れた紅茶の色をして居て、平常

水層の傾斜

極めて清冽なのが、かうも變るものかと思はれるほどであつた、平常はフオル標準液の入號で、已に山中の湖として色が薄く透明度も少い、昨夏洪水期に觀測した折りに新らしく發見した事實は、透明度の變化に就いて極めて珍な重要な事であつた、即ち湖の北端に主なる川が流れ込み、南端から流れ出す、其川口と川口の間で或る一定の距離數ヶ所を透明度を計れば距離に比例して段々と湖首より湖尾に行くに連れて透明度が増して来るとかう云ふ新事實であつた、此れは濁水が流入して湖尻の方に行くうちに段々に沈澱して、終局には全く美しい水となつて流出する爲めである。

水温は他の山中の湖と別に變つた所が無い、一體に淺い故夏は底まで熱せられ冬は長く凍る、此頃は寒さも湖底まで通り底でも四度以下に降るらしい、唯一つ面白いのは細長い湖の常として北風などが強く吹けば湖の北から南へ水温の層が傾斜する事である、此の場合には南端の表層の水温が北端の夫れより高いのである、此は風の起らぬ前には湖面至る所同様に熱せらるゝ、故何所も同温であるが例へば北風が湖面を吹いて湖面の水は著しく南側に吹き

木崎湖の魚類

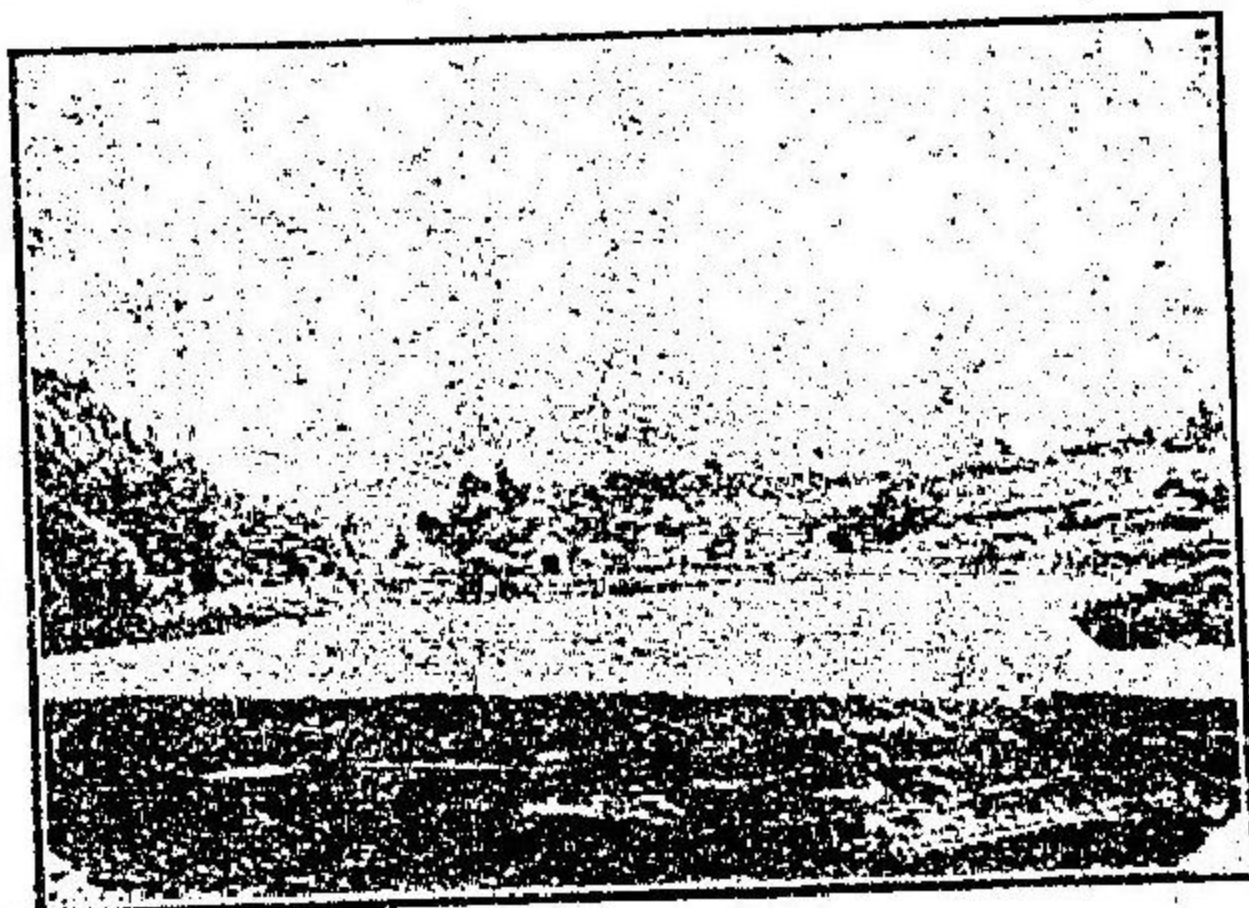
寄せる、故に之を捕ふ爲めに北の方では冷いのが深層より表面に上る、又同時に湖底では反対の方向即ち南より北に流るゝ水層が出来るが、此の現象に就いては複雑なものを野尻湖と葦湖とで観測した。
木崎湖には魚殊に鮒の大きいのがあり、普通食用に供するのが長さ一尺餘、此外に似鯉(サイ)と云ふのがある、刺身に殊によい、土地の人の食用としては十分の分量を産して居るが、尙ほ養殖の計畫をして、湖首の海(ウミ)の口と云ふ所に孵化場を設け十和田湖からカバチエツボ(姫鱈)の卵を取寄せ組合の力で遣つて居る、此湖は水面非常に穏やかで平常殆ど無風、一日水面に一の漣漪を見ずして終ることは珍らしくない、四十一年の八月日本の中部各地に大暴風雨あつた時にも此湖は夢にも之を知らなかつた程である、畢竟高山の蔭にある爲であらう。

(二) 中綱

湖畔の家悉く南向き

木崎湖と青木湖との中間にあるから中綱と云ふ名がついたのかも知れない、海の口の人家から北の方一里で湖岸に達する、始めは木崎湖の上の田の縁を

湖の主は鐘



中綱湖より青木湖の遠望

行くが此の田のある所は明かに古い時代には木崎湖の一部らしい地形である、間もなく非常に狭い谷に出て直ぐ又た開闊な所に出る、此所に湛えて居るは、即ち中綱湖である、湖の西に中綱部落がある、此部落の形の面白いのは家が悉く南向きに造られ、往來や地形などに一切お構ひなしに南に向いて居るのである、湖の最も深い所が八米、湖縁の東側の山は多く茅山で一二の山崩れの跡がある、傳説に依れば此所に十石寺と云ふ寺があつたのが、山崩の爲め湖中に落下して無くなつて仕舞つた、此寺にあつた鐘は即ち此湖の主だと云つて居る、埋木も出る相だ、一面に泥深い、面積は尙ほ〇方料四七九あるが、所詮は段々埋つて消滅するものに違ひない、此地方では現に湖とは思つて居らず水溜り同様に思つて居る、魚類は鯰などが少し計り取れる計り、養魚の計畫には此湖があつては却つて邪魔になる、浅い故に夏は水温高く冬は氷が數月間張つて居る、又た此湖の浅い所には、瓦斯が

水温瓦斯

黒い水と白い水

浮遊生物

發生し水底から氣泡沫が出て居る、此も段々埋つて來る湖の特徴の一つであるが、諏訪湖の様に多量でないから應用に適しない。
山の陰で水は靜かであるから湖面の一部に水の色の變つた帯の様なものも歴々と見えることがある。フオル氏は此の油を流した所を『黒い水』白く光る所を『白い水』と稱して居るが此湖で云ふ船道とは即ち白い水のことである、此れは別に船の通ふた跡に出来るのでなく一種の水面の反射作用で出来るのである、又た或る期節に水面に一種の白い微醬油の微の如きものが浮んで然かも僅かの時間に大に擴がり、又間もなく消滅する事がある、重もに春先きであるが、此れは恐らく一種の浮遊生物の發生から起る現象ではあるまいかと思はれる、又た秋の晴れた夜半から曉に亘つて湖上から龍燈が上ると云つて居るが、一寸要領を得ない。

(三) 青木湖

中綱湖の北岸築場と云ふところから北に向けて一町計り進めば一條の川に依つて連絡した青木湖がある、湖は周圍僅かに一里十八町で深度は四十八米

白馬岳の登山者

湖面専有者の失望

ある、川は青木湖から流れ出て、一の低い山を破つて急流を作り中綱湖に落るのである、二三軒の宿屋は此の川、深い川に跨つて設けられて入口は東西にある、東口は糸魚川新街道即ち此湖の西側に通せる馬車道に向ひ、西口即ち裏は昔からの街道に接して居る、裏の方の街道は遙かに新街道に較べて悪い道だが古い爲めに部落は此の方にある、築場には西山清市と云ふ人の經營して居る宿屋があつて此街道筋の小立場となつて居る、此宿屋は兩方に湖を望んで景色はよし、又た旨い魚を味ふことも出来る、馬車が大町と此地の北にある北條間に通するので、乗る客は主にも白馬岳の登山者、中には外國人もあれば稀にハムマーを持つた高山跋涉の日本學者もある、此點では一寸瑞西が思ひ出される。

宿屋の主人西山氏の語る所に據れば青木湖は武田信玄から代々庄屋であつた同氏の祖先が貰ひ受けて本家の専有物とし湖一切の權利を持つて居たが、如何なる故か明治の初年に之を村の共有財産に編入された、此時所有權を主張したけれども、別に記録の確かなものゝある譯では無く、唯口碑に傳へられ

湖魚を神前に供する奇習



青木湖

て来た丈けであるから、見すく権利を放棄したさうだ。此湖に産するアカハラに就いては面白い事がある。古く白鳳二三年の頃より稀に此湖のアカハラを漁つたもので、大町の南約一里の池田町へ行く道の傍に宮本神明宮と云つて元と仁科六十六郷の總社で極めて古い祠があるが、此祠の祭の日にアカハラを供物に備へる習慣がある。舊曆六月一日から十四日まで彼の築場の青木湖の堰にて漁る。之を漁る時には宿屋の主人は湖畔に小屋を作り潔齊して遣る。そして十五日に之を焼く。自宅では女子の汚れがあるから小屋でする。火を作る爲めに大町の或る一定の鍛冶屋から燧石を取り寄せるのである。かくて十六日に出来上れば、北の方數里の神城村^{シシキヤ}字佐野から二人の夫に二の藁つとを作らせ、此に二百尾宛の魚を刺し、人夫が之を擔ぎ大町に至つて鍛冶屋に休憩し間もなく宮本宮司の宅に行く。此人夫の前には村民が立派な行列をして來るが、此宮司宅からは何れも上下を着用しモノ／＼しき

行列をして神殿に赴き、彼のアカハラを供へて種々祭事をする。祭後氏子一般に對して少し宛なりとも魚を頒ち與へるのである。此の供物は村の庄屋即ち西山家てやる。明治六七年頃迄繼續されたが後に廢された。其後は形式だけどもと思つて西山氏が六月十六日にアカハラを百匹宛神前に供へるが、土地の人は却つて可笑しな事と言つて笑ふ。昔は二百なのを今百に減じたから魚が取れなくなつたなど、も言つて居る。

第六章 琵琶池と大沼池

(一) 琵琶池と其附近の池沼

裏街道の昔

信越線の豊野驛から東へ六里、山へ入ると澁温泉より上州草津の方へ抜ける街道がある。此れは昔し直江津方面から高崎へ来る街道で、一方の輕井澤を通るのに對して裏街道と言つたもので、女の旅人が多く此の道を通り、却々繁昌したものである。今日では前橋街道として立派な縣道になつて居る。此街道を進んで澁温泉に出で、夫れより一里餘りを山中に分け入ると大分高い杳掛ウツカケと言ふ所にタツた一軒の茶屋がある。此茶屋に憩うて澁茶を啜りながら眺めると北から南へ掛けて蜿蜒長蛇の如く走つて居るのは千曲川。之を中央にして所謂千曲の平原がツツと眼下に開き、遠く長野の市街さへ夢の様に見える。又た北陸街道で俳人一茶が「……嫁になつたら綿帽子」と口吟んだ、有名な妙高、黒姫飯綱と云ふ三つの美しい火山を始め、越中、飛彈の山々が恰かも繪のやうに見える。平原を隔て、雲か霧かとも見えるは野尻湖である。此所は餘程の高所で

絶景佳景

小いが一の平原を爲して居る。池の平と言つて昔し湖水のあつた其跡であるやうだ。草津街道を更に一里進むと、又稍々平坦な所に出るが其東方に位せる笠岳、志賀岳などの火山から管て流出した泥流や熔岩の流れが堅まつて、至る所にゴロ／＼横はつて居る。其間の窪い所には水が溜つて此の界限數里の間は點々として無數の小湖が散在して居る。

此邊は總て海拔千二百米内外の高所で、喬木が少く雜草雜木の外は一面の草原で、夫に輝石安山岩の大塊がゴロ／＼して恰も荒野の光景を呈して居る。尙ほ此邊の湖沼は不思議にも皆池の名を持つて、然も其形に依つて命名されて居る。始めて出遇ふ第一の沼は一沼、市沼とも書く」と云ふ浅い沼で、普通の場合には長さ七十間幅四十間、平生貯水池となつて居るが水の最も深い時は三間餘にもなると云ふ。湖縁には杜若、カンゾウ、擬寶珠、トリカブトなど生え、中にはトランプラン「震地」の性質を帯びて居る所もある。水際にはモーセンゴケが澤山生えて居る。此沼には出口がないから若し溢れ出る場合には東に流れて琵琶池に落ちるのである。

トランプ
ラン

湖中の覇者
琵琶池



體は南北に長く四百何間位である。

尙進んで深き角間川の谷の縁を通れば向ふ側に幕岩と云ふのがある、幕岩は坊寺山の山腹にある高さ數十丈の安山岩の絶壁で、板状又は柱状の節理を顯はして重り合ひ壯觀を極めて居る、無數の岩雲雀が巢をくつて居る、之を見ながら行くと一の牧場の中に丸池と云ふ直徑百間位の正圓形の湖がある、其の北稍々急に下つた所に此邊の小湖から見ても覇者とも言ふ可き琵琶池と云ふのがある、稍瀑布の形をした谷川即ち一沼から來るのは岩石がゴロゴロして居る間を通うて流れて此池に入つて居る、此池は形頗る琵琶に似て中央でクビれて居るが、一番狭い所で三十間位、全

湖上の鳥

湖首の廣がりや中央で幅百五十間もあるが淺い、池の中には鳥があるが、岩石の轉げ込んだもので水の増減によつて其數が違ふ、余の見た時は三つあつた其一番大きいのは上には辨天様を祀つた祠が建つて居る、湖尾は概して深く其最深所は十八米である、湖尾の方へ行くと前に沓掛て分れた、岩菅登山道がある、此道の東側にある谷川は乃ち彼の丸池と二里山奥の大沼池の水を灌漑用として引いたのを一旦琵琶池に貯へて置き、湖へ注ぐ所から十數間の距離に水門があつて再び流出させるのである、水門は一寸立派である、水の増減は季節によつて違ふ、湖縁は砂原になつて居るが、其砂は火山の噴出物が分解され黄味がつた色をして居る。

湖畔の風景

湖の東と西には各々小高い山があり、西にあるのが朝日山で彼の一沼は其南麓にある、東のは有明山と言つて朝日山に對して明治二十年頃命名したものである、湖縁は一寸景色が好い、温泉場から少しく遠いが日歸り位の遠足好きには持て來いの所である、此湖は二の街道の間に狭まれて小さいながら割合に人に知られて居る、此の湖尻から星川の谷へ下りて更らに向ふ側の山を上

發補温泉

ると即ち岩菅山の中腹でこゝに發補温泉がある、宿屋が二軒あり、木の繁つた間の赤禿の地から湧いて出る、海拔千百五十六米、温泉は二つあり、一を天狗湯と云ふ、昔し天狗が出て病人に療法を教へたので始めて發見されたものや、酸性或はアルカリ性で高温である、一を藥師湯と云ふ、此邊を跋渉の根據地としては天狗湯が最も適當である、景色もよく、第一は谷を隔て、琵琶池の方面を見ると四邊の地形一眸の下に收まつて火山の噴出物分布の状況から湖の成因等を明かに考察し得るのである。

深度と水温

琵琶池の最大深度は三十一米、水の色はフォーレル氏標準液第四號、透明度は夏で十一米五十、四十三年夏の天候の悪い初期の或日、午後二時氣温二十六度五氣壓六百六十二耗の時の觀測で表面の水溫二十一度五、二十一米の底は九度であつた、即ち湖の水溫の成層は整列と云ふので、上から下へと水溫が減つて行く、而して冬になつて氷が張ると逆列と云つて上より下へと水溫が増す層をなす、所謂亞熱帶式温帶湖である、然し冬になると溢温泉と發補温泉間の交通が絶えるから行くものがないので、此湖に何時氷が張るか確かと解らぬ

傳説無し

が、十一月の始めには非常に寒く雪が深くなるので、氷の張つたのを見ないで里に下りる、春先きの五月には往々氷が残つて居るとのことである。又獵人の曰く「氷は十一月末から十二月初旬に張り四月の末か五月の初旬に解ける、氷の厚さは一丈余である」と云ふ。一丈餘の厚さは一寸考へ物だが或は事實かも知れぬ、雪國では湖の上層が凍るのみならず雪の重量の爲め雪のまゝ沈んで益々氷の厚さを増す事になるから、或は一丈餘にもなるかも知れぬ。琵琶池のある場所は比較的快活な氣持ちの好い丘陵起伏の間にある爲め美しい景色が無い、又た人家より非常に離れて居る譯ではないから別に不思議な傳説も無い、前の水門を改築した時に池の水を浚つたら二尺餘りの緋鯉が出た、此が主だと言つて騒いだ程である。

琵琶池の東なる有明山を隔て、一の池がある、形雪達磨に似て長さ八十三間尻の方の幅三十五間程ある、湖中には一面に水草が生えて居る、土地では此の水草を蓮と云ふので、蓮池と呼んで居る、恐らく此地方で、形を名にして居ないのは彼の一沼と此池だけであらう、又た南方の小高い山を越えたと前述の幕

雪達磨の如き蓮池

岩の東なる一の丘陵の蔭に一湖がある。立派な長方形の長池と云ふ、長さ二百間幅三十五間、深は不明だが水の色は褐色でフォール標準液では測られぬ。此種のを測る爲めに獨逸のユール博士の發明した液があるが相憎持つて行かなかつた爲め、確と分らぬが、見た所ではユールの十六號か十七號に相當して居る。

此の水色の變つて居るのは寒い地方の高山の泥炭沼に固有で、又時には或る時期を限つて或る種類のプランクトンが発生した爲め、一時的に水色の變る事もある。此池のは確かと解らぬが、大分水が淺くて且つ腐蝕質の泥土沈澱の爲めかも知れぬ。此湖の北側は草原、南は比較的大きい森林がある。調査に行つたのは丁度午後三時頃であつたが、水温は二十度であつた。此湖の西、數間に又一の小池がある。殆ど圓形だが縦は六十間横は十五間、縁は植物で蔽はれ、細い川で長池と連絡して居る。北東の側に水門がある。長池に對して小池と呼んで居る。尙三角形の三隅池、木戸池、瓢箪池、其外まだ一澤山ある。

四十八池

瓢箪池と木戸池

三隅池から木戸池へ行く途中に、稍々廣い平原があるが、此平原は明かに昔し

湖のあつた跡で、一面の草原である。一時此地を開墾して米を作つたが、水利の便があつても氣候が寒いので失敗に了つた。兎に角此地方は昔から四十八池と唱へ非常に湖水の多い所だが、今日已に消えて無くなつたのがあるけれども、未だ一澤山残つて居る。

(二) 大沼池

琵琶池の牧場を出發して東に行く、蓮池の傍らに稍々進むと、大沼池から流れ来る幅一間餘りの疏水路の縁に出る。之に沿うて行くと、小高い山に上る。山上には一面に岩石が處々にゴロ／＼して居る。此邊では之をゴロ／＼と呼んで居る。熔岩の横はつて居るのは此地方に限らず、富士や淺間の麓にもあるが、矢張り一般にゴロ／＼と呼んで居る。ゴロ／＼には蘚苔一面に生え、茂り上には深林で蔽はれて殆ど天日を知らない。此の蘚苔の爲め、歩行者は滑つて往々轉げる。所に炭焼小屋があつたが、一人も遇はなんだ。少し進めば稍々開濶となり、更に進んで星川の上流に下つたが、已に道は無くなつて仕舞つたので、川原時に谷川の中をチャブ／＼行つた。

蘚苔多きゴロ

熊笹から熊
笹へ

相憎二三日前からの雨に増水し、色は黄濁して且つ深い時には腰きり入つた事もあつた。同行者と繩で繋がつて遡つたら時には岩が流れて来て中央は極めて危険なので、岸の熊笹から熊笹へと頼つて約一里計り進み、始めて一の大沼池と云ふ湖に近く出たが、川の増水の爲め渡る事が出来ず、樵夫に命じて大い楫を倒させ、之を渡つて湖岸に着いて、ホット一息ついた。湖岸には堅固な堤が築かれて、長さ二十五間、高さ三間、そして高さ一尺二寸、幅一尺四寸の水門がある。堤上から湖面を見ても全部見えない程不規則な程に灣入した形をして居る。此時は丁度四十三年夏の大洪水で輕井澤邊の汽車は不通になつた前日即ち八月十一日、寒い上に雨と川の爲めグズ濡れとなり、火を作らうにも薪はなし、大に困難した。正午に湖畔で気温十度、水温十一度であつた。

手が凍える

豫め筏を用意したが、操縦は出来ず、風波危険な爲め残念ながら調査中止。又面倒して定常振動を計る道具、自記水位計なども辛うじて据附けたが、何分手が凍えて器械を運轉する事も出来ず、僅かに立ちながら晝食を認めて元の路を戻つたが、一層増水して先よりも遙かに困難を感じ、ホットくの體で沓内の

堰止湖

茶屋へ歸つた。思ふに土手に上つて湖を見たのは、其實湖の一部でなく、湖面は遙か向ふにあつて湖の流れ出した谷の一部が堰止の爲めに湖の一部の様な形をして居たのであつた。水門の横に一の川があるが、此れは洗堰の如く洪水期に餘水を流す場所らしい。水の色は緑、且つ石垣の下には黄色の鐵質の澱が浮いて居る。余の後に調査に行つた或技術家の話に據れば、堤の下でプランクトン、ネットを下ろして見たが、更に何も獲物が無い。生物は居らぬらしい。居ても極めて僅かであらう。従つて養殖業に勿論不適當であらう。

此湖の平面實測圖は二十八年水利組合で作つた、周圍二十六町二十五間、面積十八町七反五畝、形極めて不規則で、北方に深く灣入して其灣の底から流れ出して居る、深さも温度の關係も今は解つて居ぬが、言ふ迄もなく冬は凍る温帯湖であることは確かである。水温は夏にも高温にはならぬらしい。志賀山の裾と赤石山の裾の間に挟まれて星川の源を爲して居るが、此は火山の噴出物によつて堰止めて出来た湖であることは間違なからう。又た地形から見ても面積の割合には深いと思はれる。一體かう云ふ出来方の湖沼は、何時も割合に深い

のである、其れは日光の中宮洞湖や菅沼が既に證明して居る。序でだが此地方の山は毛無火山筈の一部分で、下高井火山群と云つて澤山の舊火山より成る所である。

第七章 榛名湖の奇現象

四十四年二月二十一日午前八時伊香保を發し雪道を一里上れば、即ち海拔三千數百尺の瘦哇峠である。此日極めて快晴、目の前の榛名富士は言ふ迄もなく遠く野州や越後の山々頭に眞白の雪を戴きたる巒峰綿々として連なり美觀言ふ計りなく、坐る中歐アルプ連山を望んだ曾遊が思ひ出された。湖畔亭からの迎ひの人と共に、更に一里を下り、榛名富士の北麓榛名湖排水口たる沼尾川口から愈々湖氷の上に出た。

雪と灰と氷
の互層

氷上は二寸餘の積雪更に其の下に布ける灰様の薄い層は即ち先頃淺間が嶽爆發の際降らした火山灰であるのは面白かつた。其灰の下は即ち厚さ二尺程の美しい堅氷である、氷上を渡るに連れて異様の響が此方彼方に起り、剩さへ氷の下に落ち行く様な感じがするけれども案内者は平氣なもの、殊に信州諏訪湖では二寸以上になれば危険が無いとしてあるに思ひ及び、心強く方々を跋涉觀測した。

無数の御渡

驚いたことは信州諏訪湖で古來より神業として一種の禍福吉凶を卜するものとして居た彼の御渡りなるものが、湖岸陸に近い所に無数に存在して居るのであつた。更ら

に又た氷が日中気温の高い時に膨脹して岸の枯れ葦も氷りと一緒に陸地に押し上げられたのが、又た其儘凍りついて宛然たる一種の高さ四尺程の堤を爲して居るなど非常な奇觀であつた。

日は早やトツブリと暮れた、湖畔の唯一の宿屋なる湖畔亭縁側の日南で、日中十一度の気温であつたのが、午後六時頃には氷點下二度に下つた。日中気温の爲めに容積膨脹して居た氷が、気温低下の爲めに、俄かに収縮する際に自然と龜裂を生ずると共に、異様の音響を發するのである。午後七時には氷點下三度に



氷結せたる名湖の上の水の山脈

自然の妙音律

裂を生ずると共に、異様の音響を發するのである。午後七時には氷點下三度に

氷の大圓盤

下つた、湖上忽ち起る暗夜の大音楽、我等は思はず恍惚として此の妙なる音律に神を奪はれた。

榛名湖畔には人家と云ふものは僅かに湖畔亭唯だ一軒、然かも其中に神を凝らして氷上の大音楽を聞くは、空に燦たる無数の星と我等のみである。地には即ち周圍一里の氷の大圓盤、之を譬へば山姫が寒夜のすさびに天界の大菩薩機を仕掛けたるにも似たらんか、さなきだに四邊は森閑として居る上に、凍てつく寒さに乾燥し切つたる空氣として、牙えに牙えたる音色……

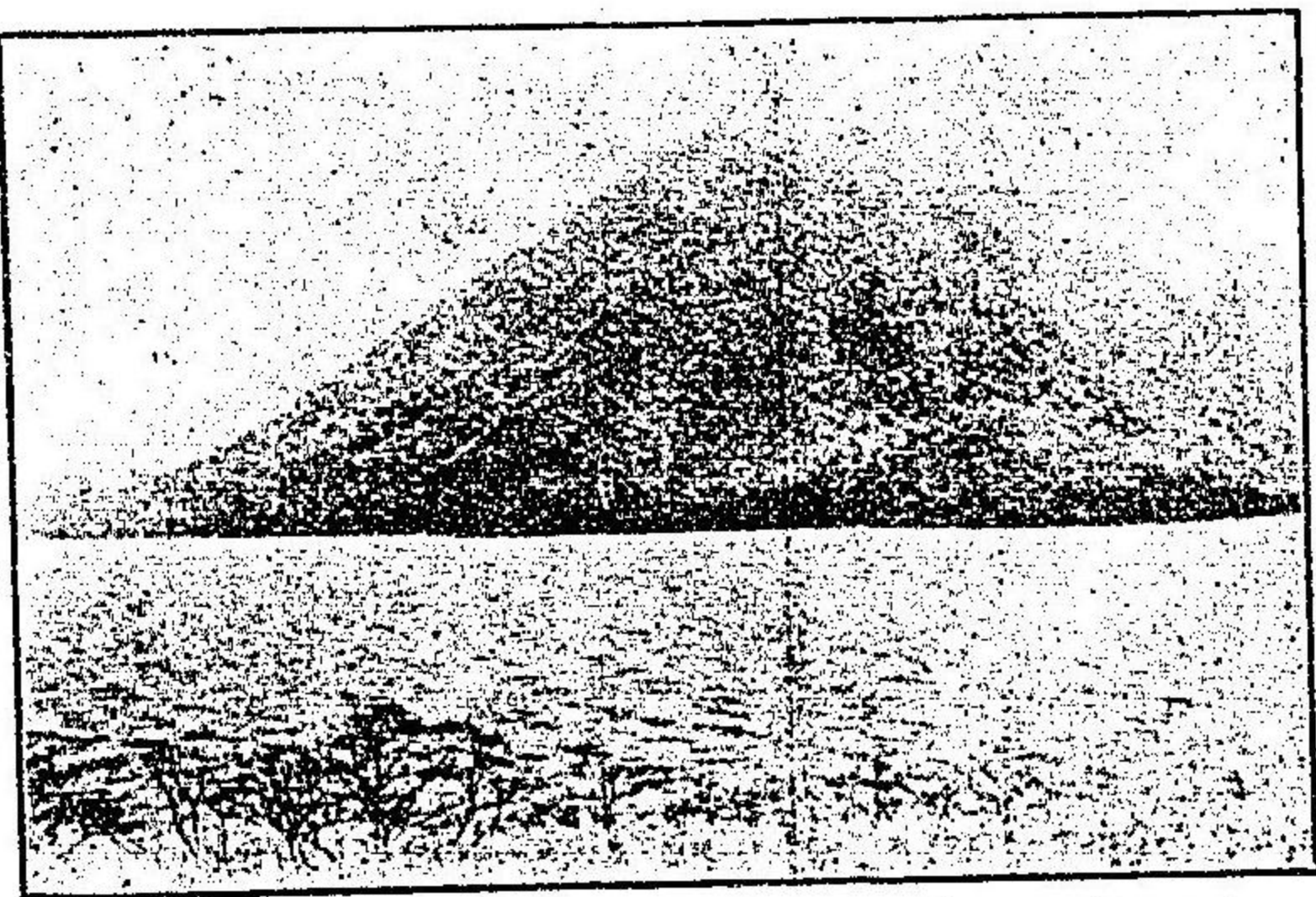
妙なる演奏

カラン、コロンは琴の音、ポン／＼は鼓、ドン／＼は太鼓、シヤラ／＼は琵琶か、中には一聲ドーンと大砲の響きの様なヤ／＼／＼との鳴動もある。清音、濁音、細い音、大い音、或は單音、或はゴツチャ、續いては絶え、断えては續く、然かも一音高くなれば四周の山々は隙さす一々木靈を返すのである。最も巧みなる人の子より成れるオーケストラの妙技も此の自然が心を凝めた演奏には却々に得及ぶまじと聞き惚れた。

面白い音數

此夜午後七時から拂曉まで各時間の一分間／＼に發した各種の音の數を調

査した其結果は下の通りである。



(雪は點白の面湖)湖名榛の冬

の關係から起るものであらうか。此は尙ほ能く研究する考である。
榛名湖は昔は伊香保沼と呼びて『北國紀行』に『唐衣かくる伊香保の沼水に今日

午後七時	十八回	午後八時	二十五回	午後九時	二十八回
午後十時	三十回	午後十一時	二十五回		
午後十二時	三十九回	午後一時	四十六回		
午前二時	四十回	午前三時	三十回		
午前四時	二十五回	午前五時	十九回		

長い結氷期

湖畔の氣温

は玉ぬく菖蒲をぞ引く』の古歌もある。旁々今日に至る迄單に夏場として知られて居る丈けて冬場としては全然放棄されてあるのは極めて惜しい事である。彼の諏訪湖の水は一月中旬に氷り二月末には解けて仕舞ふが、榛名湖は十一月末から氷り初めて三月末か四月中旬に解ける。結氷期間の遙に長い上に厚さは諏訪湖の夫れの數倍もある。寒國的遊戯として推奨す可き氷滑を遣る場所としては諏訪湖よりも遙かに適當である。今日では已に伊香保迄は電車も開通し伊香保から湖上までは僅かに二里である。若し縣並びに附近の有志が考を茲に致し、氷滑運動と氷上の大音楽を呼び物に大に都市人を招く手段を施したならキツト成功するだらうと思ふ。

午後六時	二度	午後七時	三度
午後八時	三度六分	午後九時	四度
午後十時	四度	午後十一時	三度八分
午後十二時	四度五分	午前一時	五度一分

午前二時	五度
午前五時	五度
午前六時	九度
午前七時	八度

午前三時
午前五時
午前六時半

五度
七度七分
十度五分

湖沼の研究 終

明治四十四年十一月十六日印刷
明治四十四年十一月二十日發行

(定價金九拾錢)

著 者 田 中 阿 歌 麿

發 行 者 佐 藤 義 亮

印 刷 者 畑 中 爲 之 助

印 刷 所 國 光 印 刷 株 式 會 社

不 許 複 製

◎ 湖 沼 の 究 研 ◎

東京市麴町區飯田町三丁目廿五番地

發 行 所

新

潮 社

電話【香町】二二三三番
振替【東京】一、七四二番

◎新釋源氏物語(第一)

藤井紫影氏 沼波瓊音氏 著
佐々醒雪氏 笹川臨風氏 著

(忽再版)

國家無上の至寶たる源氏物語を精細に解釋し明快に論評し、且つ之を現代語に譯せる大事業は茲に其の完成を告げたり。六冊四千頁、學界と文壇とを驚して稀有の大著也。

◎和譯法華經

田中智學先生序 山川智應氏註
姉崎文學博士序

(最新刊)

溫雅にして暢達、時人の耳に入り易き假名交り文となし、章毎に其大意を説き難解の字句には懇切なる註解を加へ、以て何人もよく此大聖典の眞味を味ふことを得せしむ。

◎南朝五十七年史

(筆蹟、地圖十數面) 笹川臨風氏著

(蒙天覽)

考證博大、論斷明確、飽くまで事實の闡明によりて火の如き意氣精神とを現はす。確かに我が史學上の一大權威にして、萬戸必ず一巻を藏すべき國民的大寶卷也。

◎ツアラトウストラ

ニイチエ著 森鷗外氏序
生田長江氏譯

(第二版)

トルストイと共に輓近歐洲思想界の巨人たるニイチエが一代の心血を注ぎたる其代表的作品にして、此を譯するは、即ち複雑なる近代思潮その物の精髓を傳ふる所以也。

▼總洋裝 最上製

▼特價一圓八拾錢

▼小包料拾貳錢

▼袖珍最上製 美本

▼定價一圓二十錢

▼小包料八錢

▼總洋布 最上製

▼定價一圓四十錢

▼小包料十二錢

▼總洋布 最上製

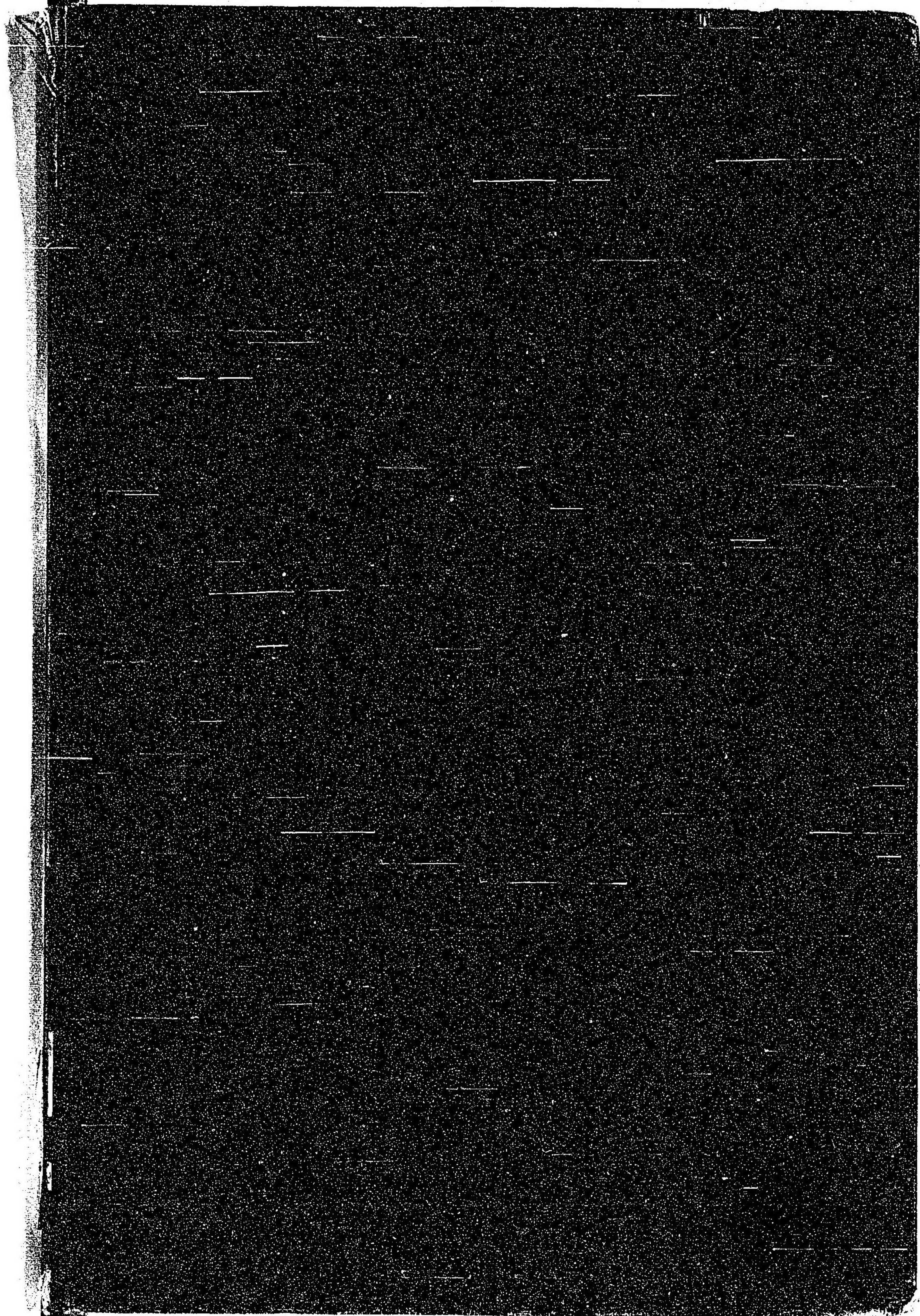
▼定價二圓三十錢

▼小包料十二錢

新 潮 社 出 版

昭和六年十一月二十二日
新潮社發行

NANYODO BOOK-STORE
MOTOMACHI HONGO
TOKYO
店本堂場南



452.93

Ta.717k

056330-000-3

452.93-Ta717k

湖沼の研究

田中 阿歌麿 / 著

M44

CAL-0019

